

グトウルフ神話TRPG

シヤロフ・ホームズの怪事件簿



呪いの空き家の冒険

作/水色眼鏡



くクトウルフ神話TRPG・リプレイ風小説く

シャノン・ホームズの怪事件簿【呪いの空き家の冒険】

作・水色眼鏡



★はじめに

本書はエンターブレイン社刊【クトゥルフ神話TRPGルールブック（第6版）】ならびにサプリメントを用いて創作されたオリジナル小説です。

シャーロック・ホームズの世界を題材にリプレイ風の冒険譚を語るといいうもので、後述するように、作中で使用される用語やシステム等は前掲の著作に基づいています。ちなみに本書は完全ではありませんが、かなりのネタバレを含みますので、これからクトゥルフ神話TRPGをプレイする予定の方は、まず原ルールブックを通読されることをお勧めします。

なお、作中に乱丁やお見苦しい点がございますが、なにとぞご容赦下さい。

## ★目次

・序章〜ディオゲネス・クラブにて

### 【解説編】

1・まずはここから始めよう

2・セッションの前に

3・クトゥルフ神話って？

4・クトゥルフ神話TRPGとは

5・【クトゥルフ・バイ・ガスライト】とヴィクトリア朝

6・リプレイ風小説を書く意味

【実況編】

1・導入部くサセックスの丘の家

2・探索者を創ろう

3・ロウイット夫人の依頼

4・調査は最初からつまづく

5・周辺調査は念入りに

6・空き家の怪異

7・古い記録は語る

8・再びコルビッツ屋敷へ

9・廃墟にて

10・スコットランドヤードと精神病院

11・うっかり者ジョン・ランセ

12・決戦へ

13・生ける亡霊

14・真相は闇の中

15・セッションを終えて

★あとがき





★【序章 デイオゲネス・クラブにて】

わたしことジョン・H・ワトソンはこれまでの手記において家庭的な事情に言及するのを極力避けてきた。これはシャーロック・ホームズ氏の輝かしい事件簿であり、私事を語るのはふさわしくなかったからだ。紳士たるもの、たとえ親愛なる読者諸兄といえど、軽々しく内々の話を開陳すべきではないという自覚もある。

しかし、1903年の頃だが、わたしとホームズ双方に看過しがたい事情が起り、それについて個人的な備忘録として記しておこうと思う。もしこの手記をご覧になる読者には、これまでの事件簿とまったく性格が異なることをお断りしておきたい。なんとすれば、これは親としての心情なのである。

あれは12月のことだった。ロンドンには珍しく晴れ渡り、あのいやらしい霧がい

ままで存在しなかったかのごとき清涼な空気に包まれていた。心なしかベーカー街の通りを行き来する馬車の蹄の音も軽やかなマーチのように感じられ、厳しい寒さにも関わらず人々も浮き浮きと歩いているようだった。

「いつもこうならいいね」とわたしは快活な気分でもームズに語り掛けた。

その頃のわたしはロンドン郊外に居を構え、一財産築いたのでそろそろ医者稼業から足を洗おうかと考えていた。歳のせいとは思いたくなかったが、都会の喧騒が耐え難くなってきたこともあり、ホームズとは自然疎遠にならざるを得なかった。

久しぶりに会った彼はやや白髪まじりではあったが、往年の姿と変わりなく、がっしりとした細身の長身を愛用の椅子に収めていた。ホームズはわたしの言葉を聞くと昔ながらの皮肉な微笑を浮かべ、並んで窓際に立った。

「もしロンドンに例の霧が立ち込めなくなった時は」

いつものペルシャスリッパからパイプに葉をゆっくり詰め、

「断言してもいいが、日の没するところのない帝国も遠からず日没を目の当たりにすることになるだろうな」

「まさか！」

「いいや、そのまさかだよワトソン」

ホームズはいささか憂いを眉に含め、ゆったりと煙草をくゆらせた。

「君は大英帝国が世界に覇を唱えられた理由はなんだと思う？」

「もちろんわが王室の威光と英国臣民の絶えざる努力の成果だ」

「その絶えざる原動力の元となったのは？まさにあの忌々しい霧と雨の多い陰鬱な気候のおかげさ」

「なんだってそんなことを言うんだ」

楽しい気分には水を差され、わたしは苛立った。そして彼の発言に内心少なからず衝撃を受けていた。というのも、ホームズは権力や血統というものを冷笑する一方で、わが大英帝国の忠実なしもべであることは自明の理だったからだ。

彼は椅子に座りなおすと、背もたれに体を預けながら、

「考えてもみたまえ。このちっぽけな島国が南国の温暖な気候と豊かな資源に恵まれていたと仮定するんだ。誰が荒波を超えて異国へ旅立とうと思うだろうか？

他国の富を欲したり、飽くなき探求心を刺激するのは、現状への不満だ。欲求不満こそが目標を与え、明日への活力となる。ちょうどぼくが手掛けた難解な事件のようにね。憎むべきは平凡だ。退屈は悪だ。しかし英国はますます発展し、社会は平穏で豊かになりつつある。我々は喉から手が出るほど欲しかった富と安寧をようやく享受出来るところまで来たのだ。

…しかし、それは同時に動機の消失という相反する現象をも引き起こす。

いいかいワトソン、間違はなくわが栄光の帝国は代償を払う時がきつと来る。現にその兆候は極めて微かだが見え始めている。だが我々はそれに対する備えがまったく出来ていない。そこをぼくは深く憂慮するんだ。

それにね、こうも明るいロンドンに犯罪を包み隠さず太陽の下にさらけ出してし

まうだろう。いやまったたく、モリアーティ教授がいなくなってからロンドンの犯罪はちいさくなる一方だ。ぼくらの時代は確実に終わりを迎えつつある。

——というわけで、引退する時期も近いというわけさ」

「ホームズ！」

実を言うと、わたしはそれほど驚かなかった。久しぶりに彼から会いたいという電報を貰った時、なんとなく予感めいたものがあつたからだ。しかし、やはり現実に口に出して言われるとドキリとするものだ。

「いやいやワトソン、君にもわかっているはずだ。∴そして、ぼくらの次の世代に関する頭の痛い問題も整理しておかなくてはね」

「どういうことだい」

「デイオゲネス・クラブへ行こう。マイクロフトに会いに」

唐突な申し出だったが、彼の兄に会う時はいつだって冒険を意味したから、わたしは二つ返事で引き受けた。それを察したホームズはあらかじめ釘を刺した。

「ああ、ワトソン。がっかりさせて申し訳ないが、今回は仕事絡みではない。だが、間違いない君も興味を持つと思うよ」

デイオゲネス・クラブは時の流れなど存在しないかのように、ロンドンの中心街にその身を潜めていた。沈黙と孤独を何よりも愛する男たちが互いに目礼さえ交わさず新聞を読み耽っているのは、何度見ても奇妙な感じがした。しかし、それゆえの不思議な安心感も確かにあるのだ。唯一会話を許されている談話室へ通されると、すぐにマイクロフトがやって来た。太っているが押し出しの強い巨体と印象深い大きな頭は相変わらず彼の英国における地位を物語っていた。

「掛けたまえ、ワトソン。郊外の空気はきみを健康にしたようだね。だが運動不足気味なところをみると、医者の仕事は順調なようだ。そろそろ引退を考えているん

じゃないかね」

「まあ、そんなところです」

マイクロフトは億劫そうに椅子へ腰掛けた。ふだんから憂愁を帯びた顔がいつそう憂鬱そうだった。

「今日は事件とは一切関係ない。我々の家庭的問題について話し合おうじゃないか」

「家庭的問題？」

「つまりわたしの娘と君の娘さんについての合意を取り付けておきたいと思っ  
ね」

「『あなたの娘』ですって？」

寝耳に水の発言にわたしは思わず聞き返した。と同時に、マイクロフトが家庭の事情を語るという、およそありそうもないことが起こっているのに仰天していた。





しかも彼はわたしの娘についてすでに調査済みらしい。これはゆゆしきことだ。わたしは英国政府を象徴するこの男が何を言いたいのか非常に不安になった。

「ジェシカが何か問題でも？」

ホームズが口を挟んだ。

「ぼくが順を追って説明しよう」

我々は煙草を一服して気持ちを落ち着かせると、ホームズの言葉を待った。

「——ぼくは以前からひとつの持論を持っている。つまり、遺伝とは隔世的に補い合うものだということだ。有能な王の息子が無能だというのは珍しいことではない。実直な親の遺伝子に欠けているものを子供が体現するということだ。一代で築き上げた富を放蕩息子が食い潰す例は枚挙にいとまがない。その逆に、乱暴者の父親の子供が善人であることも多い。ようするに、互いを足せば十全な人格が現れるというわけだ」

「つまりどういう…」

「非常に活発なんだ、マイクロフトの娘は。親とは正反対にね」

マイクロフトが決まり悪げに身じろぎするのを見たのはこれが初めてだった。

この男が動揺するとは想像もつかなかった。彼は叱られたブルドッグのように少し背を丸め、太股の間に両手を挟んでいた。

「シャノンはいささか冒険好きでね」

「それは控え目過ぎる表現じゃないかな、マイクロフト」ホームズは苦笑した。

「君の娘は現在ウォールソール私立女学院のロンドン分校で文化人類学部の助手を務めているが——そう、あの『ぶな屋敷』のヴァイオレット・ハンター嬢が校長だ——遺跡の発掘を手伝いにエジプトまで赴き、色々派手な真似をやらかしたそうじゃないか」

「いや、あれはエジプト政府の汚職役人が黒幕で、我々の貴重な考古学的成果を

金のために横取りしようとしたからだ。シャノンが運悪く墓泥棒と鉢合わせた時、相手は3人で皆銃を持っていた」

「ところが、そいつらを全員半殺しにしてしまった。危うく国際問題に発展するところだったな」

「想定外のトラブルさ。おかげで奴等の密売ルートも発覚したので、あながち災厄だけとは言えん。…まあ、揉み消すのは大変だったがね」

「そんな目に遭っても懲りずにいるようだな」

「勘が鋭いのはわたし譲りだ。しかし、あの活動力がどこから来ているのかまったく理解に苦しむ」

「それは君が父親として退屈過ぎるからだと思うよ」

愉快そうにホームズは揶揄した。が、すぐに眉をしかめ、

「…だが、バリツの師匠に紹介したのはぼくの失敗だったかもしれない。女性の護身術は教養の範囲だと思ったのだが」

「まったく大したことをしてくれたものだ。おかげでシャノンも新たな才能に目覚めてしまった」

「ワトソン、きみも当然承知だろうが、『バリツ』は日本のマーシャルアーツだ。優れた使い手が日本からやってきて、そのうちの一人にぼくの姪を任せただ。彼らに懲らしめてもらえば少しはおしとやかになるのではと思ってるね。…ところが敵もさるもの、彼女はみるみるうちに腕を上げ、なんと免許皆伝にまでなってしまった。完全なる誤算だ」

「ああ、シャノンの『護身術』は完全に攻撃手段だからね。シャーロック、わたしはいつかあの娘が人を投げ殺すのではないかとヒヤヒヤしているのだ」  
ホームズはわたしに冷ややかな笑みを向けた。

「というわけだ、ワトソン。マイクロフトにはシャノンという冒険好きの無鉄砲な娘がいて、いつこちらが巻き添えを食うか頭痛の種になっているのさ。ところで君にも娘さんがいたね。ちょうど年頃なんじゃないかな」

わたしは身を固くした。

「ぼくの家庭を調べたのか」

「どうか気を悪くしないでもらいたい。きみの家族関係についてはあの時計の一件以来、ぼくから知ろうとしなかったと断言する。しかし、口に出さなかったが、きみが亡くなった兄の娘を養子にしていたのは薄々分かっていた」

「ぼくの家に来た時か」

「そうだ。きみたち夫妻の趣味にしては少々若過ぎる置物やクッションが目についた。それにしまい忘れた女の子の好む人形が床に落ちていたこともあったな。きみたちには子供がいない。きみが親戚筋と疎遠だったことは言動から伺えたから、親類の子が遊びに来たとは考えられない。ならば子供はどこから？ 当然、ごく近い者からだ。酒癖の悪い兄に娘がいたと仮定しても不自然ではない。もし

推測が正しければ、人情の篤いきみが引き取ったと考えるのが当然だ。しかし、きみはそのような事情を語りたがらない」

「確かにきみの言うとおりだ。あの子は兄が亡くなってから親戚中をたらい回しにされていたんだ。きみと同居していた時は手の打ちようがなかったが、結婚を機に引き取ってもいいんじゃないかと思つてね」

「お兄さんは亡くなる直前、深く悔いたのかもしれないな。ひよつとして娘を頼むと言われたんじゃないか？ きみが兄を毛嫌いしているにも関わらず、形見の時計を大事に持っていたのは、その表れだと思えるんだがね」

「兄は悪人じゃなかった。ただ試練に弱かったんだ」  
わたしはかつての面影を思い浮かべ、しんみりした。

「きみに黙っていたのは悪気があったのじゃない。きみはそういう事に無関心だと思つたし、実際わたしたちの事件にはまったく関係なかった。

妻はジェシカを溺愛してね。きみとメアリーに先立たれても辛うじて立ち直れたのは、ジェシカが居てくれたおかげなんだ」

ホームズは頷き、足を組み替え、パイプを一口吸った。

「その娘はこのうえなく温かな家庭で育ち、立派に成長した。ああ、言わなくてもいい。ジェシカ・ワトソンが姪と同じくウォールソールにいたことは分かっている。学部が違うので直接顔を合わせたことはないようだが」

「何もかも知ってるみたいだね」

「それで、卒業後はどうしているのかな」

「ホームズ。これはぼくの家の問題で、君たちが関係することでは…」

「とんでもない。これを見たまえ」

さっと懐から取り出した手紙。差出人は他ならぬわたしの娘だ！

「ぼくは度々きみの娘さんから手紙を受け取っていた。黙っていて悪かったが、彼



女に口止めされていてね。ところでワトソン、きみは口の堅い信頼できる人間だが、身内にはいささか甘いらしいな。ぼくの事件簿を預けるには心もとなくなってきたよ」

「そんな言い方はないだろう」

心外にもほどがあるので、わたしは憤慨した。

「では、われわれがあれほど秘密にできたソフィー・アンダーソン号の行方が九龍に隠匿されていた事実を、どうして彼女が知りえたのだろうか？ 『疲れた船長』が肌身離さず持っていた忌まわしいインドの像については？ イサドラ・ペルサーノが発狂した原因は、唯一手にしていたマツチ箱のせいだったことは？ 不運にもマツチ箱に残された奇妙な昆虫の死骸を得たおかげで、名状しがたい物を暗闇の中に見出し、精神病院へ収監されるはめになったのだが、きみの娘はまるで見てきたように描写してみせた。そう、きみの記述のようですね！ 記録はチャリングクロスのコックス&カンパニー銀行に保管されていたはずだ。してみると、あの書類箱をまた引き

出したらしいな」

「もう時効だろうと思って。時々昔を思い出したくなるんだ。しかし、書類箱は家の金庫へ厳重にしまつてある」

いささか弁解がましくわたしは言った。

「われわれの事件に、きみ、時効はないんだよ」

ホームズは厳しく言ったが、すぐに表情を和らげ、

「だがまあ、知られてしまったことは仕方がない。どうやらきみの娘さんは何らかの方法で金庫の開け方を知つたようだ。きみが気づかなかつたところをみれば、彼女は非常に慎重で抜け目ない性格のようだな。それに親譲りの冒険心と飽くなき探求心がある。女性にはふさわしくない資質だが、おもしろい」

自分の落度を指摘されていると同時に、珍しくホームズが女性を、それも自分の娘を褒めているので、わたしは体がむずむずした。そしてこの事態をどう受け止めたらいいのか分からずにいた。年頃の娘が男性に手紙を出すなど慎ましかとはと

でも言えない行為だが、相手が他ならぬホームズとは！

「それできみに手紙というのは…」

「うん、時々ぼくが手掛けた事件について質問してくる。それと賛辞だ。つまらないお世辞にはうんざりするが、ぼくが『小惑星の力学』の一節からモリアーティ教授の正体を見抜いたことに関して言及するのは悪くない」

彼は細長い指に挟んでいた分厚い手紙をためすがめつ眺め、

「一番最近の手紙はシカゴから来ている。質は良いが、古い封筒だ。インクが掠れているところを見ると、羽振りが良かった時もあるが、今裕福ではないらしい。きみの娘は両手利きだ。途中から文字の傾きが変わっている。筆跡が明快なのは握力がある証拠だ。女にしては力があるらしい。しっかり者で、自立心旺盛、文筆で身を立てることを願っている。しかし、親に反対されたので渡米して各地を回っている。彼女は男装で二丁拳銃を使いこなし、ボクシングの心得もある。まあ、ざっと

見てそんなところかな」

「彼女がそう言ったのかい？」

今更ながらホームズの慧眼にわたしは身内の問題に言及される不愉快さも忘れ、椅子から腰を浮かせそうになった。彼はちらりと笑みを浮かべ、

「いや、手紙の消印を見ると、ネブラスカからコロラド、ユタ、カリフォルニアと続き、今度は東部に戻っている。彼女の文章は親に似て散文的で、少しばかり扇情的なきらいがある。これは明らかに読者を意識したものだ。ということは、娘さんはきみの事件簿から強い影響を受けている。自分の事情はほとんど話さない。ぼくのささやかな名声にあやかろうと思われたくないのだろう。だが『…巡業の馬車から西部の荒野を眺めると…』とか『カラミティ・ジェーンの撃ち方は少々眉唾ものかもしれない』『バリツを使いこなせるところをみるとあなたのボクシングスタイルはクインズベリーですか、それともロンドン・プライズリングですか』というような記述から、彼女は射撃とボクシングに詳しく、自分も使いこなせることをほ

のめかしている。誰が教えたのか？ むろん父親だ！ 君は軍医で、武器を使いこなせ、場数を踏んでいる。『ぶな屋敷』であの悪党のルーカッスルが飼い犬に喉笛を噛まれた時、君はためらいなく狂犬を撃ち殺した。誤射もあり得たのを考えると、相当の腕前だ。ワトソン、ぼくはきみを一度ならず危険な場面に巻き込んだものが、それもきみが暴力の場面を何度となく潜り抜けた過去を買っていたからだ。きみの勇敢さは確かな自信に裏打ちされている。この危ういご時世、自分の大切な人娘にその経験を教えない手はないだろう」

「弁解のように聞こえるかもしれないが、ジェシカにせがまれて仕方なく教えただ。それに男から暴力を振るわれた時、身を守る手段がなくてはね。わけでもあの子の父親は…だが、今でも良いことだったとは思っていないよ」

「しかし、間違いなく娘さんには有益だったわけだ。非常に才能があるね、その方面には」

「なぜそれを?…まあ、きみの姪の話じゃないが、教えてみて驚いたのは確かだ。ジェシカは器用な子で、珍しく両利きなんだ。ボクシングも一流だ。リングに上がれば同じ体重の男ならまず負けないだろう」

「素晴らしい!」

ホームズは素直に称賛した。

「さて、続けると、注目すべき点はまだある。文中で使われた『巡業』とはサーカス団か何かを連想させる。掛け合わせると、生活のために得意の射撃術を披露していると考えられる。ビル・ヒコックの西部劇ショーがもてはやされているのをみれば、彼女もワイルド・ウエスト・ショーに参加したことがあると思うのが自然だ。ショーとしても射撃としても男装した方が有利に違いない。現にカラミティ・ジェーンも男装していた」

「どれも合っているよ。男装は女学校で覚えたらしい。背が高いので、劇の男役にしか選ばれないとよくぼやいていた」

「それが役に立つこともあるわけだ」

ホームズは両手の指を合わせ、わたしをおもんばかるように見た。

「：ワトソン、ぼくはあえて君の家庭に踏み込もうとはしなかった。今も同じ気持ちだ。だから、ぼくがお節介な隣人のように思えたなら許してくれたまえ。察するに、ジェシカ・ワトソンはイギリスに戻りたがっているようだが、きみが許さないので帰国できないと思っているんじゃないかな」

「そんなことはないさ。ただ、独身の女が小説家になりたいなんていう考えはバカバカしくて話にならないと思うね。結婚して暇潰しにするのならまだしも。メアリー・シェリーだってそうだったじゃないか」

「うん。きみの言うことは一理も二理もあるよ。ぼくもその点に関しては同意見とあっていい。：しかし、いくらぼくたちの意に沿わないとはいえ、女性が社会的な存在になりつつある事実は受け入れねばならないとも思う。」

そこでだ。ここに、お転婆を絵に描いたような娘がいる。彼女はまさに火の塊だ。血気盛んだったぼくらのように冒険に飢えている。あの性悪猫を抑えておけるのは、頑健で、良識があり、危険にもたじろがない鉄のような意志を持ち、しかも彼女の心情を理解できる者だ。英国紳士にはいささか荷の重い課題だろう。結婚生活に押し込めても、一日で離婚へ追い込まれる。

そしてきみの娘は、まさにその資質を備えた人物だ。女性であるという点もこの場合には有利に働く。どうだろうワトソン、きみの娘さんをぼくの危険な姪の御者役になってもらうというのは？もし賛成してくれるのなら、ぼくはベーカー街を彼女たちに譲ってもいいと思っただが」

「しかし、きみはロンドンの重鎮じゃないか！」

「うむ、そこで最初の話へ戻るんだ。ワトソン、ぼくは犯罪捜査に関して微力ながら尽力し、人類へささやかな貢献が出来たと思っただが何事にも潮時という



ものがある。きみが郊外へ引っ越したように、ぼくにとってもロンドンには刺激のある場所ではなくなってきた。研究すべきところは研究し尽くし、捜査の指針を書いたハンドブックも出版した。これはスタンリー・ホプキンスのような後継者の役に立つだろう。スコットランドヤードもこれからは科学捜査の時代に入る。ぼくの出る幕はないよ。

それにね、ワトソン、ぼくは前々から自然の驚異に目覚めつつあるのだ。神の創りたもうこの世界は、いくら解き明かしても片鱗にすら触れられない神秘に満ちている。ダーウインの進化論は表層的なものに過ぎない。もっと奥深い何かが隠されている。いやいやワトソン、人間の犯罪などこれに比べれば実にちっぽけなものだ。特にぼくは昆虫の生態を観察することに非常な喜びを覚える。何の道具もなしにミツバチが精巧な社会を作り上げるのは驚嘆以外の何物でもない。ワトソン、いつかぼくは名声など幻想だと言ったね。だが自然の神秘はぼくを失望させたりしないと思う。

というわけで、残された時間は養蜂に捧げようという算段だ。場所はもう見繕つてある。サセックスに住み心地のいい家があつて、ハドスン夫人も連れてゆこうと思ふんだ。彼女なしではどうやって生活を立てたらいいいのか、ぼくには想像もつかない。晴れた日にはチャンネル諸島まで見渡せる。

だからベーカー街を去ることに何の感傷もない。あとはきみの返答次第というわけさ」

「ワトソンくん、わたしからもお願いしよう。大英帝国が存続するかどうかは、きみの娘がシャノンに首輪を付けられるか否かに掛かっているのだ」

わたしはホームズとマイクロフトを交互に見た。ふたりとも一見無関心のように煙草をくゆらせていたが、長年付き合ってきたわたしには、彼らが強い緊張感に苛まれてるのが手に取るように分かった。不意にわたしは、我々がこのような問題に深刻な表情を浮かべる状況がおかしくなってきた。わたしは苦笑して返答した。

「それだけ言われたら、断るのは難しいようだね。ジェシカにはわたしから手紙を

書いておこう」

彼らは明らかにホツとした様子で、組んでいた足を解いた。

「いや、ワトソン、きみは面白がっているようだが、今日マイクロフトの言ったことが大袈裟でなかったことはいずれ分かるよ」

「もしくは、永久に分からない方が世界平和のためだということだな。∴ではワトソンくん、よろしく頼む」

マイクロフトはいかにも肩の荷を下ろしたといった風情で立ち上がり、談話室を立ち去った。

ホームズは窓辺に近づき、パイプの吸い口を外へ向けた。

「見給えワトソン、また霧が出てきた」

いつの間にか窓の外はおなじみの黄色い霧で厚く塗り込められていた。先程の快活な街の音は吸い取られ、我々の見慣れた陰鬱なロンドンが帰ってきた。ホームズ

はパイプを吹かし、悠揚迫らざる態度で窓外を眺めた。それはまるで預言者のようだった。

「災いが来るぞ、ワトソン。世界を覆う暗い影が。人類を根こそぎ変えてしまう大いなる変化の時がきつと到来する。だが、たとえ往年の輝きを失おうと、大英帝国が滅びることはないだろう。ぼくたちの出番はまだ完全に終わったわけではない」

【シャノン・ホームズの怪事件簿..呪いの空き家の冒険】

【解説編】

★1 まずはこちらから始めよう

みなさん、時空を超えてこんにちは。わたしはジェシカ・ホームズです。

わたしはあのジョン・H・ワトソン博士の兄、ヘイミツシュ・ワトソンの娘です。

色々な事情があつてパパ：つまりジョン・ワトソンの方ですが：に引き取られ、育ててもらいました。彼は義父になりますが、本当の父親だと思っています。

そしてわたしの相棒、シャノン・ホームズは、かの大探偵シャーロック・ホーム

ズ様の姪です。つまりホームズ様のお兄様マイクロフト・ホームズ氏の娘になります。でもシャノンときたら猫みたいに四六時中飛び回るし、マイクロフトおじさまは動くのが何より嫌いだし：あ、でも、頭はとっても良いんですよ？ ホームズ様より良いって云われているくらいだけど、その点に関しては抗議の手紙を書いてもいいです。ともあれ、こんなに似ていない親子も珍しいなあという。

わたしたちはホームズ様の計らいで221Aに住んでいます。：えっ、どうして221『B』じゃないのかって？ そうですねえ、恐れ多いっていうのもありますが、お隣の221Bにはホームズ様の大ファンや、いまだに彼が引退したことを知らない人たちが沢山やってきます。もしわたしたちが221Bに住んでいたなら彼らの応対に忙殺されて何も出来なくなってしまう！ それで221Aに住まわせてもらいました。家の女主人はなんとハドスン夫人のお孫さんなんですよ。

シャノンとわたしはチームを組んで事件を解決しています。

もちろん、ホームズ様のように神掛かった推理力とか、豊富な知識はありませんが、わたしたちにも得意技があります。それはずばり『名状し難い事件』です！ 幽霊とか妖怪とか、ホームズ様が嫌いそうな事件を扱うんです。

シャノンはあの腕っ節と直感力で…彼女の第六感ってけっこう当たるんですねー、なぜだろう…頭はあんまり良くないのに…事件へ頭を突っ込み、じゃなくて捜査し、わたしはその横でフォローします。

わたしたちにも一応身分があって、シャノンは文化人類学者の卵、つまり大学の助手（そのわりにはあまり勉強しません）で、わたしはパパに倣って作家の卵を目指しています。お医者さんはあんまり…注射とか嫌いなので。

ホームズ様のところへは色々な方が依頼に来られましたが、わたしたちの方は主に女性のお客様が多いんです。



今回の事件はホームズ様が復活された『空き家の冒険』にちなんで【呪いの空き家の冒険】としました。

次からは冒険を始める前のお約束とか、解説とか、色々お膳立てを用意しています。初めてなので一から出発するつもりで。どうか最後までわたしたちにおつき合  
い下さい。

★2 セッションの前に

———某日某時。

とある時空を超えた場所で、二人の少女と一人(?)の得体の知れない猫の首がテーブルを囲んで座っている。

テーブルには【クトゥルフ神話TRPG】や【クトゥルフ・バイ・ガスライト】という名前の分厚い書物や、色々な種類のダイス、何枚かの記録用紙と消しゴムつき鉛筆、それにティーセットとビスケットが置いてある。

彼女たちはこれから冒険へと旅立つのだ：

\*\*\*

チェシヤ猫「——というわけで、これよりセッションを始める。俺様はチェシヤ猫である。名前はまだない」

少女A「いきなりだな」

少女B「というか、なんでチェシヤ猫がいるんですか？」

チェシヤ猫「それは俺様がチェシヤ猫だからだ」

空中に浮かんでいた猫の首がスーツ…とニヤニヤ笑いを残して消える。

少女A「答えになってない」

少女B「そのまま消えると終わるので帰ってきててください」

再びスーツ…と現れるチェシヤ猫。

少女A「まんま不思議の国のアリスだねえ。変な猫」

チェシヤ猫「（無視）とにかく、ちみら（＝君ら）とクトゥルフ神話TRPGで遊ぶことになったので、よろしく頼む。

ちなみに→のように○の中で『無視』とか書いてあるが、これはいわゆるト書



きというやつだ。厳密な意味のト書きじゃないが、セリフの補助とってくれたま  
い。(笑) っつのはおなじみだし、(泣) (怒) とかもある。その辺よろしく」

少女A「あっち向いてしゃべってるよ」

少女B「誰に向かってしゃべってるんでしょねえ(とぼけ)」

チェシャ猫「さて、まずはちみらの自己紹介をしてくれたまい」

少女A「えー、はじめまして、ども、シャノン・ホームズです。一応主人公張つ  
てます」

チェシャ猫「バカっぽいな。主人公にしては」

少女B「ま、まあ、おいおい活躍すると」

シャノン「チェシャ猫が何を言うか。何を言うのか!」

チェシャ猫「なんか一人メタ発言しているが、無視してよろしい」

少女B「こほん。…そして、先ほども出ましたが、わたしがシャノンの相棒ジェシ  
カ・ワトソンです。よろしくお願いします(ペコリ)」

チェシャ猫「うむ、できたお嬢さんだ」

シャノン「ふつつかな子ですが」

チェシャ猫「おまえが言うな」

ジェシカ「それで、今日はわたしたちで何かするというお話でしたが…」

シャノン「RPG7とか言ってたよね」

チェシャ猫「それは対戦車兵器だ。どうやったらそう聞こえるんだ」

ジェシカ「クトゥルフ神話：ティーアールピージー？」

チェシャ猫「それはこれから説明する」

シャノン「いいじゃん、サクッと始めようよ。だいたい、この本読む人は知ってる

んだから説明なんかすつ飛ばしやいいのよ」

チェシャ猫「めんどくさいからって丸投げするな。それにこの本独自のルールとか

自己解釈があるんだから、あらかじめ言っとかなきゃ後で面倒だろ」

ジェシカ「名前を聞いたことがあるだけって方もいるかもしれないよね」

チェシャ猫「ということで、次からはこのセッションの目的と、クトゥルフ神話を含めた解説から入る。けっこう長いので、すでに知っているという人はこの項目を飛ばして、【実況編】から読んでくれたまい」

シャノン「了解！」

★3・クトゥルフ神話って？

チェシャ猫「ま、これはさすがに読者諸君もご存知と思うが、中にはよく知らないという方もいるかもしれないな」

シャノン「著者も詳しくないよね？」

ジェシカ「え、そうなの？」

シャノン「クトゥルフ神話TRPGの本と、ラヴクラフトの文庫本全集と、あと少し読んだくらい」

チェシヤ猫「ものすごい数あるもんな、クトゥルフ神話の本は」

ジェシカ「（アンチヨコを見ながら）日本だと菊池秀行さんとかが書かれていらっしやるんですよね」

チェシヤ猫「クトゥルフの名を冠してないものも含めれば日本国内でもかなり出ているはずだ」

シャノン「わたしは観てないんだけど『這い寄れ！ニヤル子さん』シリーズもクトゥルフなんだよね」

ジェシカ「加えて未来ではニコニコ動画なんかでクトゥルフ神話TRPGのセッションを元ネタにした動画が爆発的な人気になったんですね」

チェシヤ猫「そういうふうに、わりとなんにでもネタに使われるんだな、クトゥル



フ神話は」

シャノン「で、そもそもどういう神話なわけ？」

チェシャ猫「それはわからん」

シャノン「——は？」

チェシャ猫「『わからん』というのが、まずクトゥルフ神話のステータスなのだ。

人間ごときに理解できない存在だからクトゥルフ神話なわけで」

シャノン「えくくくく…」

ジェシカ「もともとはアメリカ合衆国で1920年〜30年代に活躍されたハワー

ド・フィリップ・ラヴクラフト、略してH・P・ラヴクラフト先生が始められたん

ですよね？」

チェシャ猫「そう。1920年代というと日本では大正時代、第一次世界大戦と第

二次世界大戦の間だ。この頃は世界的に混沌とした時代で、人類史上初の大量虐殺

戦争が開始され、それまで隆盛を誇っていた欧米ならびに周辺諸国は大ショックを

受けた。

科学が発達し過ぎて、人間の想像を超える事態がこの頃から出始め、第一次世界大戦はその頂点だった。まさかこんなに人がバタバタ死ぬとは開戦当初は誰も思っ  
てなかったわけだ」

シャノン「昔みたいになさ、適当に殺し合って、適当に仲直りするっていう政治ゲームが通じなくなった時代」

ジェシカ「王様や貴族が好きに軍隊を動かして、民衆はその脇で見ているっていう構図が、近代社会に入ってみんなが国民になると、そうはいかなくなっちゃったんですね」

チェシャ猫「んで、戦争はうやむやのうちに終わったものの、国民の数——特に男子諸君がごっそり減って、どの国もげっそりやつれてしまった。勝ち負け関係なく。そんな中で一人元気だったのが米国だ」

ジェシカ「ほとんど損害を受けないうちに終わってしまったし、国力も充実してい

たので、戦勝国の中では一番得をした国ですね」

シャノン「国際社会の地位が格段に上がったよね」

チェシャ猫「というわけで、戦後特需景気——日本にもあったが規模はこちらの方がデカイ——にみまわれ、それはもう大変な盛況ぶりだった」

ジェシカ「みんな、戦争の恐怖から立ち直って浮かれ騒いだんですよねえ」

シャノン「そのわりに社会不安とか犯罪の横行とかあったけどね」

チェシャ猫「この頃の米国はまだキリスト的なお硬い風潮があつて、なんと酒を飲んじゃダメっていう有名な禁酒法が成立しちまった」

シャノン「ザル法だったけど」

チェシャ猫「そう、かなーりゆるい法律で、抜け道はいくらでもあった。そのおかげでご禁制の酒をギャングたちが売り捌いて大儲けし、一気に巨大犯罪組織へのし上がる。今で言うマフィアとかシンジケートとかのハシリだ」

ジェシカ「それで警察と派手な撃ち合いとか、ギャングスターが現れるとか…」

チェシャ猫「まあ、こんな感じで富めるがゆえにだんだん退廃的になっていって、一方では犯罪が横行し、もう一方では金持ち連中が馬鹿騒ぎをやるっていう」

シャノン「貧乏人は貧乏なままだったけどね」

ジェシカ「社会不安があったんですね、アメリカにも」

チェシャ猫「そして、ついに人類最大の戦争・第二次世界大戦の悲劇へと突入するわけだが……そういう平和なのか戦争なのかどっちつかずの時代に生まれたのがラヴクラフトだ」

ジェシカ「彼は『パルプフィクション』っていう安物の小説誌に作品を出していたんですね」

シャノン「それなに？」

チェシャ猫「理屈もへったくれもない娯楽専用の安い雑誌だ。この頃はまだラジオしかなかったんで、スマートフォンやインターネットどころか、テレビもなく、映画すらやつと音が出るようになった白黒映画だった。だから気楽に読める雑誌類は

大衆の憩いでもあった」

シャノン「うちの時代（1900年前後）は新聞がそうだよ。いろんなのが一杯あってさ。お硬い政治向きのから、犯罪とか噂話満載のゴシップまで」

ジェシカ「もちろん『ストランド・マガジン』は外せませんね」

チェシャ猫「パルプフィクションには色々ジャンルがあり、探偵物から怪しい犯罪話、ちよつとエッチっぽいファンタジーから、チープなSF物まであった」

ジェシカ「『ウィアード・テイルズ』が先生の活動の場なんです」

チェシャ猫「おおむねそう。一応SF雑誌の体裁を取っているが、面白ければなんでもいってという編集方針のもと、実に色々な作品が掲載された。チープとはいえ、『ウィアード・テイルズ』にはレイ・ブラッドベリの『火星年代記』やヒロイツク・ファンタジーの元祖ロバート・E・ハワードの『英雄コナン』シリーズ、ホラー映画にもなったロバート・ブロックの『サイコ』などなど、今日の映画やマンガ、ゲームに多大な影響を与えた、錚々たる顔ぶれが揃っていた。言うまでもなくラヴ

クラフトもその一人だ」

ジェシカ「ラヴクラフト先生は独自の立ち位置にいたんですよ」

チェシャ猫「彼の場合はSFと神話をミックスさせた新しいホラージャンルを開拓したんだな」

シャノン「具体的には？」

チェシャ猫「それまでの神話はだいたいギリシア神話。それに後輩のローマ神話や北欧神話、アーサー王伝説、騎士道物語、それに地元の妖精や妖怪の話、あとは幽霊譚なんかがネタの主流だった。

ところがさっき言ったように科学が発達して、それらの神話はもう色褪せちゃったんだな。なにしろ人間の与える恐怖の方がずっと大きい。

そこでというか、ラヴクラフトが新しく宇宙から来た恐怖とか、科学では説明されない、あるいは科学によって新しく生まれた恐怖なんかを、魔女伝説などを混ぜてゴツタ煮にした作品を作り出した。

その最もたるのが『宇宙からの色』だ。あれはもう完全に従来の神話を逸脱して、宗教の力ではどうにもならんような恐怖を描いている」

ジェシカ「宇宙といえば『闇にささやくもの』なんかもありますね」

シャノン「え、あれはでも、宇宙人つてはつきり言っていないんじゃない？」

チェシャ猫「真相をはつきりさせないのがラヴクラフトの流儀だ。しよせん人間の浅知恵で宇宙の真理なんか理解できるわけないってんで、キリスト教的な勧善懲悪をほぼ全否定し、人間じゃ手も足も出ない怪物だの神掛かった生き物を創造して、読者に新鮮な恐怖を与えた」

ジェシカ「その代表格がクトゥルフなんですか」

チェシャ猫「『クトゥルフ神話』と銘打ったわけじゃないけどな」

シャノン「あれ、そうだったっけ？」

ジェシカ「ラヴクラフト先生がそう言ったわけじゃなくって、後から括りとして『クトゥルフ神話』と呼ばれるようになったと」

シャノン「へえ、そうなんだ。てっきりラスボスがクトゥルフで、あとは幹部と戦闘員がいるのかと思ってた」

ジェシカ「全然違うの混ざってる（汗）」

チェシャ猫「戦闘員は『イー!』って叫ぶんだよな」

シャノン「そうそう。バリエーションあるけど」

ジェシカ「チェシャ猫さんまでメタ発言しない」

チェシャ猫「すまん」

ジェシカ「そういうふう新しいホラーを開拓したラヴクラフト先生だったんですけど、手紙魔で、彼が」

シャノン「友達の作家へ手紙を書きまくっていたと」

ジェシカ「で、その友達も長〜い返事を送って」

シャノン「けど実際に会ったこともない相手もいるんだよね」

チェシャ猫「今風に言うならネット友達っつーか、フレンドな」



シャノン「ちよつと引きこもりっぽいとこあんのね、彼」

チェシャ猫「そう。結婚もしたけど面倒臭くなってやめちまったし、もともと女に興味はないっぽいなの。社交的な性格ではないし、1920年っていう世代が自分に合わなくて、もっと昔の、たとえばちみらのようなヴィクトリア朝なんかに憧れていた」

ジェシカ「文体まで昔風に書いたんですね」

チェシャ猫「だから日本語なんかに訳す時、えらく読みづらいものになっちゃう」

ジェシカ「イメージとしては古風なホラー物ですか」

シャノン「そのわりにSFっぽい作品も多く手掛けてるんだね」

チェシャ猫「『冷氣』とかな。今みたいにきっちりジャンル分けせず、書きたいものを堂々と書いた感じがするな」

ジェシカ「その手紙魔のラヴクラフト先生が、友達のを広げて、クトゥルフ神話を盛り上げたという」

チェシャ猫「なんか同人サークルのノリなんだな。『これ面白いだろ』って見せて、ネタやるからお前も好きに書いてみろって。著作権とか全然気にしないもんだから、面白かった奴らがドンドン書いてって、しまいはラヴクラフトの死後も増殖し続け、えらい数の作品が出ちゃった。

しかも公式の基準ってのが無く、ラヴクラフトの小説をお手本に『だいたいこんな感じ』ってそれぞれが自己解釈の基で書いたから、なにがどーなってんのか分からなくなっちゃった」

シャノン「それこそ、はつきりさせないわけね」

ジェシカ「その一番が彼の弟子だった、オーガスト・ダーレス先生なんです」

チェシャ猫「ダーレスはラヴクラフトの作品を広めるのに一番熱心で、私財を投げ打ってまで頑張った。…ところがこの人、自分でもクトゥルフ関連の小説を書いているんだが、自作の中で『神々に謀反を起こした反乱者クトゥルフは…』と言ってしまったから大変だ。『そんな話じゃないだろ』と各方面からツツコミを受け、日本

でも散々叩かれちゃった」

シャノン「勸善懲悪じゃないのを勸善懲悪にしようとしちゃった」

ジェシカ「ダーレス先生の作品はわたしたちには分かりやすいですけど。ラバン・シュリュズベリイ博士も登場させましたし」

シャノン「呼びにくいわ」

チェシャ猫「ラバン博士は強烈なキャラで味があるんだが、ダーレスは割りを食った感じだな。才能はあるんだが」

ジェシカ「ホームズ様のパステイ・シユも手掛けてるんですよね」

チェシャ猫「他にも有名どころとしてはロバート・ブロック、ロバート・E・ハワード、ラムジー・キャンベル、ブライアン・ラムレイ、コリン・ウィルソンなどがあ  
る」

ジェシカ「今でも欧米ではクトゥルフ関連の新作が出続けているんですよね」

チェシャ猫「数え切れないほどだが、いずれも共通するのは人知を超えた悪夢とい

う点だ。ハッピーエンドで終わるものはまずない。人間の力では太刀打ちできない怪物だらけで、良くて生き残り、まあ普通は殺されて終わる」

シャノン「あるいは永遠の悪夢を見続けるとか」

ジェシカ「そんなのに今から挑戦するんですか。うーん…」

チェシャ猫「とはいえ、出だしから分かるだろうが、勸善懲悪とはいかないまでも、俺様たちはノリと勢いで突破するので、名状し難い恐怖はむしろ難しいかもしれないぞ」

シャノン「そう、最後はわたしの必殺技が炸裂して終わると」

ジェシカ&チェシャ猫「だからそれクトゥルフ神話じゃない！」

★続きは本編で★

# シャノン・ホームズ

## SHANNON HOLMES

性別 ♀ 誕生日 1885年3月3日 血液型 B型

職業 <女性冒険家>ウォールソール女学院  
ロンドン分校文化人類学部助手

STR(筋力) DEX(素早さ) INT(知力) IDE(アイデア)

13 16 15 75

CON(体力) APP(外見) POW(精神力) LUK(幸運)

13 15 17 85

SIZ(体格) SAN(正気度) EDU(教養) KNO(知識)

9 85 16 80

DB(ダメージボーナス) MP(魔力) HP(耐久力)

±0 17 11

特徴: <バリツ> <鉄の神経>

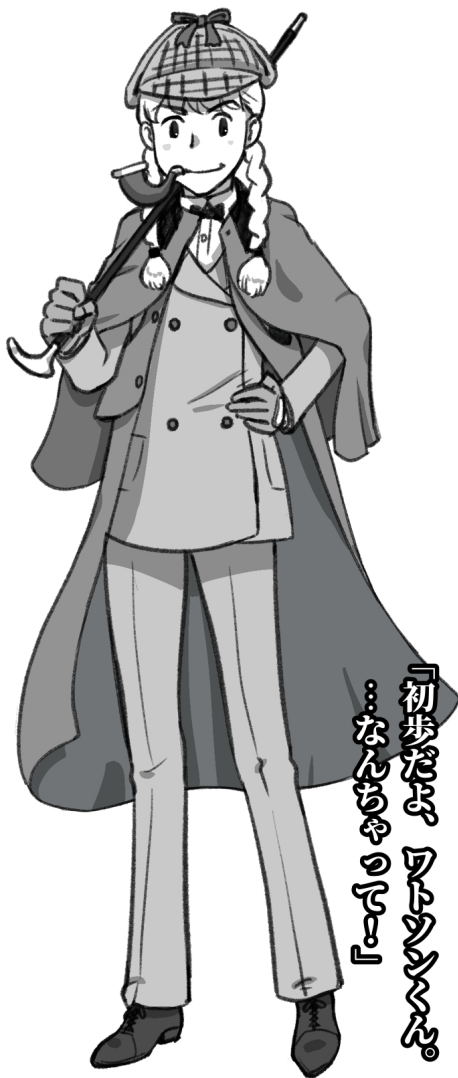
回避<82> 聞き耳<70> 忍び歩き<70>

人類学<42> 跳躍<70> 追跡<70>

登攀<70> 目星<84> バリツ<60>

組みつき<95>

武器: 鉛入りステッキ<55> 1D8 耐久力10



「初歩だよ、ワトソンくん。…なんちゃって。」

### 《解説》

シャーロック・ホームズの兄マイクロフト・ホームズの娘。出不精な親に似合わず冒険が大好きで、あちこちの事件に首を突っ込んで騒動を巻き起こす。特に超自然的な事件がお気に入り。彼女の「活躍」でシャーロック・ホームズの頭痛の種になっている。

現在はベーカー街221Aでジェシカ・ワトソンとルームシェア中。

職業は「ぶな屋敷」のバイオレット・ハンター嬢が校長のウォールソール女学院ロンドン分校にて文化人類学の助手を勤めているが、肝心の学問の方はそっちのけの不良助手。

ホームズの紹介で東洋の武術バリツの師匠に出会い、天性の素質により免許皆伝の腕前を誇る。その技で大男を投げ飛ばすほどの実力派。

ホームズの推理力はほぼ受け継いでいないが、動物的な勘の良さや、いかなる危険にも怯まない鉄面皮の精神力がある。

# ジェシカ・ワトソン

## JESSICA WATSON

性別 ♀ 誕生日 1884年12月12日 血液型 O型

職業 <女性作家> オカルト探偵兼娯楽小説家  
『ストーンサークル・マガジン』誌所属

STR(筋力) DEX(素早さ) INT(知力) IDE(アイデア)

13 11 14 70

CON(体力) APP(外見) POW(精神力) LUK(幸運)

12 10 16 80

SIZ(体格) SAN(正気度) EDU(教養) KNO(知識)

15 80 20 100

DB(ダメージボーナス) MP(魔力) HP(耐久力)

±1D4 16 14

特徴：<両手利き> <シャノンへの友情>

回避<88> 聞き耳<75> 目星<75>

応急手当<90> 心理学<75> 変装<70>

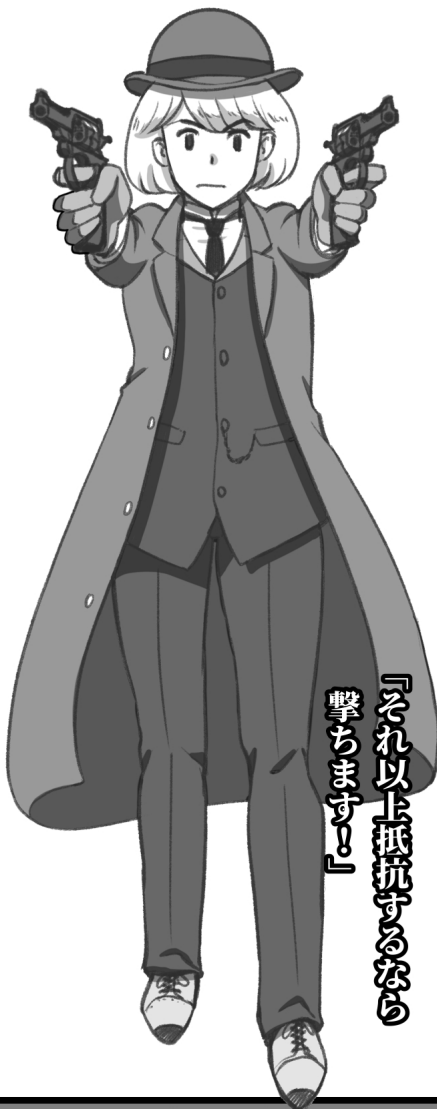
図書館<60> 言いくるめ<60>

武器：こぶし<70> 1D6+1D4

→ワンツーパンチ

拳銃<85> ウェブリー・オートマチック・

リボルバー 1D10+2 →2丁拳銃



「それ以上抵抗するなら  
撃ちます!」

### 《解説》

ジョン・ワトソンの兄ヘイミッシュ・ワトソンの娘。

酒乱の父親が原因で母親は離婚し、ヘイミッシュが死んだ後は親戚をたらい回しにされていた。

メアリー・モースタンとの結婚を機にワトソン博士が養子にした。幸せな家庭で育ったジェシカは父ワトソン博士の影響で小説家を志望。秘密の回顧録を読んで勉学に励む。

ウォールソール女学院の英文学科を卒業後、アメリカへ渡って修行し、帰国後はベーカー街221Aでシャノンとチームを組む。

エキセントリックなシャノンに比べ常識的で温厚な性格。しかし危急の際は人間でも躊躇いなく撃つ鋼鉄の意志と勇敢さを発揮する。また辛い幼少期の影響で虐げられる人を見ると冷静さを失うことも。大柄な体格と両手利きを活かして素早い連続パンチや両手に拳銃を持って撃つのが得意。

義父の教えで戦い方や初歩的な治療技術を学んでいる。

女学院時代、演劇部に所属したおかげで変装することも得意技。



